第110号

発行日：令和6年9月18日

発行者：医学研究科広報委員会

印　刷：やまと印刷株式会社

弘前大学大学院医学研究科・医学部医学科広報紙

医学部ウォーカー

1面：医学研究科長・医学部長寄稿／「健康ライフサイエンス研究講座」の設置にあたって　**2面**：「移動体験・well-being研究講座」の設置にあたって／「ヘルスケアAIシステム学講座」設置にあたって／第101回日本生理学会大会学部生ポスターアワードの優秀賞を受賞　**3面**：第65回日本神経病理学会総会学術研究会優秀演題賞を受賞して／第155回東北連合産科婦人科学会学術講演会優秀演題賞を受賞／日本女医会第69回定時総会第9回溝口昌子賞を受賞　**4面**：2024年度日本麻酔科学会若手奨励賞および第71回日本麻酔科学会年次学術集会最優秀演題賞を受賞／岩木健康増進プロジェクト・プロジェクト健診、いきいき健診を終えて　**5面**：第107回弘前医学会総会八戸で開催／優秀発表賞を受賞して／令和5年度弘前医学会優秀論文賞を受賞して　**6面**：鵬桜会総会に出席して／実験動物慰霊式／成績優秀学生表彰　**7面**：科学研究費補助金採択状況／「高校生手術体験セミナー in八戸」を開催して／学生だより 弘前大学に入学して　**8面**：学生だより 解剖学実習を終えて／写真コラム　**9面**：学生だより クリクラについて／若手研究者紹介動画　**10面**：若手教員・医師だより／書籍のおしらせ　**11面**：研究室紹介　腫瘍内科学講座、神経精神医学講座　**12面**：部活動紹介　男子バレーボール部、女子バレーボール部／人事異動

題字　元弘前大学長　遠藤正彦氏筆

医学研究科長
医学部長寄稿

令和6年度
『地域中核・特色ある研究大学強化促進事業（J-PEAKS）』の採択を目指して

医学研究科長　石橋恭之

この四月に医学研究科長を拝命してから早四か月が過ぎましたが、ここまではその仕事を覚えることで精一杯という感じでした。前回の医学部ウォーカーに、就任にあたっての目標の一つとして『地域中核・特色ある研究大学強化促進事業（J-PEAKS）』の採択を掲げました。ご存じのように令和五年度の「地域中核・特色ある研究大学の連携による産学官連携・共同研究の施設整備事業」は通りましたが、本丸であるJ-PEAKSは残念ながら採択には至りませんでした。この結果公表後に、福田眞作学長をはじめとする弘前大学本部、廣田和美前医学部長、村下公一教授などが中心となり、幾度となく対策会議が開催され、先日、令和六年度の採択に向けた新しい申請書が完成し、提出しました。その提案内容は、「グローバルWell-being共創社会を実現する異分野融合型総合知による革新的卓越研究大学群の構築」です。

日本学術振興会のHPに書かれているように、J-PEAKSの目的は「日本全体の研究力を向上させ、新たな価値創造を促進していくために、大学ファンドによる国際卓越研究大学への支援と並行して行う事業であり、地域の中核大学や研究の特定分野に強みを持つ大学が、その強みや特色のある研究力を核とした戦略的経営の下、他大学との連携等を図りつつ、研究活動の国際展開や社会実装の加速等により研究力強化を図る環境整備を支援することにより、我が国全体の研究力の発展を牽引する研究大学群の形成を推進すること」にあります。令和五年度に採択された大学十二校の申請内容を見ると、その多くの大学は〝強みを持つ特定の学術領域の卓越性を発展させる機能〟という部分を強調していました。昨年度の弘前大学はこの部分が不足していたことが反省点として挙げられました。また、改革の方向性は本学部が中心となっており、大学全体への波及効果が弱かったこと、国際連携が少なかったことなども考えられました。

これらの反省点を踏まえ、今年度は施設整備事業を利用し、本町地区に「グローバルWell-being総合研究所」が新設されました。本研究所は、①グローバルヘルス・予防医学研究部門（医学部が中心）、②ライフサイエンス・テクノロジー部門（理工・農生が中心）、③Well-beingソーシャルサイエンス部門（人文・教育が中心）という三部門で構成されています。また、この三部門に企業共同研究講座を含む健康未来イノベーション研究機構が加わることによって、総合知による全学的な研究が展開されることになります。さらに現在、国内トップ大学、ハーバード大学やNIHなど海外研究機関との連携を進めております。J-PEAKSに今年度は六十五大学（国立三十四件、公立八件、私立二十三件）が申請しております。この内採択されるのは十二～三件と相変わらず狭き門となっております。これからヒアリング等に向けて様々な準備を進めていかなければなりませんが、来年には吉報を皆様にご報告ができるよう頑張ります。ご支援、ご協力の程、どうぞよろしくお願いします。

共同研究講座

「健康ライフサイエンス研究講座」の設置にあたって

健康ライフサイエンス研究講座　教授　玉田嘉紀

令和六年（二〇二四年）三月一日付で医学研究科に共同研究講座「健康ライフサイエンス研究講座」が設置されました。本講座は第一三共ヘルスケア株式会社（東京都港区）（以下第一三共ヘルスケア）との共同研究講座で、同年七月十六日に開設式を執り行いました。開設式には、第一三共ヘルスケアからは代表取締役社長・内田高広氏、研究統括部長・濱野秀夫氏、研究統括部・作山秀氏、同部企画グループ・永井恒氏、同部価値創出グループ・杉山大二朗氏にご臨席いただきました。講座の設置期間は令和九年三月三十一日までとなっています。開設時の講座構成員は、弘前大学からは玉田嘉紀教授、村下公一教授、伊東健教授、三上達也教授、中路重之特別顧問、二階堂義和講師の六名、第一三共ヘルスケアからは作山秀氏、杉山大二朗氏、永井恒氏の三名で、全部で九名となっております。

第一三共ヘルスケアは、第一三共グループの企業理念にある「多様な医療ニーズに応える医薬品を提供する」という考えのもと、生活者自ら選択し、購入できるOTC医薬品の事業を展開している日本を代表する企業です。現在、OTC医薬品にとどまらず、機能性スキンケア・オーラルケア・食品へと事業領域を拡張し、コーポレートスローガン「Fit for You 健やかなライフスタイルをつくるパートナーへ」を掲げ、その実現に向けて取り組んでいます。こうした事業を通じて、自分自身で健康を守り対処する「セルフケア」を推進し、誰もがより健康で美しくあり続けることのできる社会の実現に貢献することを目指しております。本共同研究講座では、「岩木健康増進プロジェクト」のビッグデータを活用し、生活者の頭痛、睡眠、口腔に関する研究を進め、得られた知見を製品開発や情報提供に生かすことで、より健康で美しくありたい人々のQOL（生活の質）の向上に貢献することを目標としています。

頭痛や睡眠は全身の健康データをうたう岩木健康増進プロジェクトの健康ビッグデータに欠けていたもので、弘前大学COI-NEXTプロジェクトとしても力を入れている領域で、今後の研究の進展に大いに期待できる分野でもあります。第一三共ヘルスケアはOTC医薬品開発で日本をリードする代表的企業です。従いまして社会実装に関しては我々が教えをいただく立場でもあります。大学としては最新の研究手法のノウハウを提供し研究をサポートしていきつつ、オープンイノベーションの場を提供し様々な参画企業の業種とのシナジー効果が生まれ社会実装が進むことも期待しています。

医学研究科の皆様方のご支援・ご協力・ご鞭撻のほど、どうぞよろしくお願いいたします。

共同研究講座

「移動体験・well-being研究講座」の設置にあたって

移動体験・Well-being研究講座　教授　玉田嘉紀

令和六年（二〇二四年）四月一日付で医学研究科に共同研究講座「移動体験・well-being研究講座」が設置されました。本講座はマツダ株式会社（広島県安芸郡府中町）（以下マツダ）との共同研究講座で、同年六月十日に開設式を執り行いました。開設式には、マツダからは執行役員・今田道宏氏、技術研究所長・山本寿英氏、同副所長・坂本和夫氏、同統括研究長・本田正徳氏、同主幹研究員・道田奈々江氏、同アシスタントマネージャー・山崎陽氏にご臨席いただきました。講座の設置期間は令和九年三月三十一日までとなっています。開設時の講座構成員は、弘前大学からは玉田嘉紀教授、村下公一教授、伊東健教授、三上達也教授、中路重之特別顧問、沢田かほり助教、中澤麻衣助教の七名、マツダからはご臨席いただいた六名に九名を加え、全部で二十二名となっております。

マツダは日本を代表する自動車製造業であり、時代に適合して走る歓びを進化させ、日常の移動体験の感動を量産するクルマ好きの会社になるという「2030 VISION」の実現に向けて現在様々な研究開発に取り組んでいます。また誰もが安全・安心・自由に移動ができる社会に貢献し、日常に動くことへの感動や心のときめきによって一人ひとりの「生きる歓び」に貢献することを目指しています。弘前大学の超多項目健康ビッグデータに基づく予防医療の研究基盤と、マツダの「ひと中心」の思想や技術を融合し、「ひとを理解する」研究を加速することが本講座の大きな目標としています。

カーライフや自動車の運転といった「移動」に関する体験が、一人ひとりのwell-being にどのような影響をもたらすかについて、個人の詳細な健康データと直接結びつけて検討した研究はほとんどありません。本講座では、カーライフを通じ well-being を実現するために必要な知見を得るための研究活動を行い、詳細な個人の運動や認知の能力、性差や社会環境、生活習慣といった個人差に適合し、心身の健康や幸福体験、well-being を導く車のあり方を導き出すことを目指しています。弘前市のような地方都市では、自動車は生活に欠くことができません。一方、自動車中心の生活が健康に対して運動不足といった負の効果をもたらすこと自体は否定できません。しかし、移動することは人類に備わる根源的な欲求でもあり、これを適切に満たすことはwell-being の向上には欠かせません。マツダが岩木健康増進プロジェクトに参画することで、健康増進のための欠けていた重要な側面を補完することになり、これまでにない研究成果が期待できます。

医学研究科の皆様方のご支援・ご協力・ご鞭撻のほど、どうぞよろしくお願いいたします。

共同研究講座

「ヘルスケアAIシステム学講座」の設置にあたって

ヘルスケアAIシステム学講座　教授　玉田嘉紀

令和六年（二〇二四年）四月一日付で医学研究科に共同研究講座「ヘルスケアAIシステム学講座」が設置されました。本講座は日本電気株式会社（東京都港区）（以下NEC）との共同研究講座で、同年六月七日に開設式を執り行いました。開設式には、NECからはCorporate SVP兼研究開発部長の山田昭雄氏、同社バイオメトリクス研究所長の宮川伸也氏にご臨席いただきました。講座の設置期間は令和九年三月三十一日までとなっています。開設時の講座構成員は、弘前大学からは玉田嘉紀教授、村下公一教授、伊東健教授、三上達也教授、中路重之特別顧問、沢田かほり助教、中澤麻衣助教の七名、NECからは中原謙太郎氏、櫻井和之氏、小阪勇気氏、二瓶史行氏、梅松旭美氏の五名となっております。

NECは日本を代表するIT企業でありますが、現在はヘルスケア分野にも進出していて、AIやデジタル技術を活用し医療をデジタルで支える「Medical Care事業」、一人ひとりの日常生活に寄り添う「Lifestyle Support事業」、個人に合わせた医療を科学で支える「Life Science事業」にそれぞれ取り組んでいます。

本共同研究講座では、弘前大学が二〇〇五年より実施している「岩木健康増進プロジェクト」の超多項目健康ビッグデータと、外見や動作などのデータを解析して人を精緻にモデル化するNEC独自のAI技術を組み合わせることにより、脳卒中や心疾患、フレイル、認知症など多種多様な疾病の潜在的なリスクを推定するための研究開発に取り組み、デジタル技術によって個別最適化されるヘルスケアソリューションの社会実装を目指すことを目標としております。

これまで岩木健康増進プロジェクトへはさまざまな業種の企業から参画いただき、共同研究講座を設置してきましたが、AI技術の研究開発を本業とする企業の参画はNECが初めてとなります。健康ビッグデータ利活用に欠かせないAI技術の研究開発は、本プロジェクトではこれまで主に基礎研究を学術機関側で進めてきましたが、社会実装経験のあるAI企業が参画することで、未病・予防医学領域において基礎研究だけでなくCOI-NEXTが目標に掲げる社会実装までのピースが揃うことになり、より強固な研究開発および社会実装基盤構築の完成に近づくことになります。当初は現在掲げている研究開発目標に沿った講座名の提案を受けましたが、このような背景がありますので、より広く今後の基盤となるような思いを込めて「ヘルスケアAIシステム学講座」という名称にいたしました。

医学研究科の皆様方のご支援・ご協力・ご鞭撻のほど、どうぞよろしくお願いいたします。

【受賞報告】第101回日本生理学会大会

学部生ポスターアワードの優秀賞を受賞

医学科四年　小林仰

この度、二〇二四年三月二十八日から三十日に福岡県北九州市で行われました日本生理学会第一〇一回記念大会において、二年連続で学部生ポスター発表優秀賞を受賞しましたのでご報告申し上げます。

私たちは「The modulation of functional and trafficking properties of $GABA_A$ receptor by phosphorylation of β3 subunit」という演題で発表いたしました。この研究は、麻酔薬効果制御の新たなアプローチとして、$GABA_A$受容体のリン酸化によるGABA応答調節機構の解明を目指したものです。吸入麻酔薬や静脈麻酔薬において全身麻酔効果発現にGABA応答の増強作用が指標となっていますが、麻酔作用発現のメカニズムが明らかとなる一方で、生体側の麻酔薬の感受

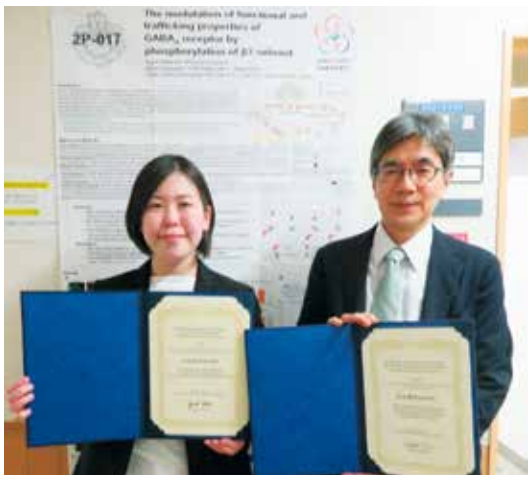
（次ページへ続く）

（前ページより）

性を規定するメカニズムはいまだその詳細は分かっていません。そこで本研究では、$GABA_A$受容体β3サブユニットのリン酸化部位に変異導入した安定発現株を樹立し、電気生理学的手法および免疫組織化学的手法を用いてGABA応答変化及び麻酔効果の変容を解析し、さらにGABA応答制御に関わるトラフィッキング関連タンパク質の探索をしました。結果としては、β3サブユニットのリン酸化部位に特異的に結合するタンパクを同定し、このタンパク質が$GABA_A$受容体のトラフィッキングを調節する可能性が示唆されました。今後はβ3サブユニットのリン酸化に関わるタンパク質の機能と麻酔薬の関連性を追求していきたいと思います。

ご指導賜りました脳神経生理学講座の上野伸哉教授、古川智範先生、下山修司先生をはじめとする先生方にこの場をお借りしまして心より感謝申し上げます。私はコロナ禍で入学し、学内アルバイト事業の一環として一年次のころからこの研究に携わらせていただきました。当初は研究に関する知識も経験も乏しかった私でしたが、先生方や諸先輩方が熱心に指導をしてくださったおかげで昨年に引き続き発表優秀賞をいただくことができました。

最後となりますが、脳神経生理学講座には一年次の基礎ゼミや三年次の研究室研修、授業後の質疑応答などをきっかけに定期的に顔を出すようになった学生が多く集っております。上野先生は学生にとても寛大で、希望する学生には学会参加の機会を与えてくださり、夏にはバーベキュー、冬にはスキーなどのイベントを開催してくださいます。興味のある方はお気軽に門戸を叩いてみてください。



【受賞報告】第65回日本神経病理学会総会学術研究会

優秀演題賞を受賞して

脳神経病理学講座　助教　三木康生

第六十五回日本神経病理学会総会学術研究会が山口県下関市で開催され、優秀演題賞を受賞しましたので報告いたします。

αシヌクレインは生理的な環境下ではシナプス前終末に存在し、シナプスの機能維持に関わります。しかし、何らかの理由によりαシヌクレインが構造を変え、不溶化・蓄積する過程で脳神経系が変性する疾患があります。これをシヌクレイノパチーと包括し、パーキンソン病や多系統萎縮症（MSA）が含まれます。我々はヒト剖検脳を用いた臨床病理学的研究によりMSA患者の二割に種々の程度の認知機能障害を呈することを報告しました。さらに、記憶障害の成因は毒性の強いαシヌクレインオリゴマーによるシナプスの機能障害であることを見出しました。しかし、αシヌクレインオリゴマーがヒトの脳でどのようにシナプスの機能障害を起こしているかわかっていませんでした。

そこで、まず我々が樹立したMSAモデルマウスを用いて、ヒトαシヌクレインの発現とともに変動するシナプス関連タンパク質のmRNAをトランスクリプトーム解析で網羅的に調べました。次に、候補にあがったタンパク質をヒト剖検脳を用いた免疫組織化学染色で病態に実際に関わっているか検証しました。ここで同定されたタンパク質がsynaptotagmin13（SYT13）です。このSYT13の局在や機能はこれまで分かっていませんでした。しかし、種々の病理学的・生化学的手法により、SYT13はシナプス小胞の放出に必須のタンパク質であること、αシヌクレインオリゴマーがSYT13と強力に結合することでSYT13の質的・量的変化が生じ、その生理的機能が失われている可能性があること、さらにSYT13の異常はシヌクレイノパチーに共通する病態であること、を見出しました。*In vitro*で異常αシヌクレインはシナプス小胞の放出を障害することは言われていましたが、人工的な実験条件下で行われていたこともあり、それぞれの実験結果が一致していないという問題がありました。今回我々は異常αシヌクレインがSYT13を介してシナプスの機能障害を引き起こしていることをヒト剖検脳を用いて初めて明らかにしました。現在、SYT13の機能調整がシナプスの機能改善につながると考え、MSAモデル動物を用いた実験を行っています。

最後に、剖検に賛同してくださった尊い志を持つ患者さんやご家族、指導してくださった若林孝一教授を含め多くの先生方にお礼申し上げます。この度は本当にありがとうございました。

【受賞報告】第155回東北連合産科婦人科学会学術講演会

優秀演題賞を受賞

産科婦人科講座　助教　赤石麻美

このたび二〇二四年五月十八日～十九日に盛岡市で開催された第百五十五回東北連合産科婦人科学会学術講演会において、優秀演題賞を頂戴しましたことをご報告致します。

発表のテーマは「帝王切開子宮瘢痕症（cesarean scar disorder: CSDi）」です。このCSDiという用語は聞き慣れない方がほとんどではないかと思いますが、「帝王切開術」は多くの方がご存じと思います。実は帝王切開術による分娩の割合は年々増加しており、一九九〇年から二〇二〇年の三十年間で約二倍に増加し、今や約五人に一人が帝王切開術により分娩している状況となっています。この帝王切開術の増加を背景として、CSDiという病態が注目されるようになってきました。

福原理恵先生と

CSDiとは、帝王切開術を経験したことのある女性が、その後に不正出血や月経困難症、過長月経、不妊症などを呈するようになる病態を指します。その機序としましては、帝王切開術の際に切開した子宮筋層が治る過程で「瘢痕」＝「くぼみ」が生じ、そのくぼみに月経血が貯留したり、あるいはくぼみの部分から出血することで不正出血の症状が現れたり、さらにその血液が子宮内腔へ逆流することで妊娠の妨げになるとされています。CSDiの治療法は保存的治療、外科的治療と様々ありますが、二〇二二年四月より「腹腔鏡下子宮瘢痕部修復術」が保険収載され、当科でも実施しており、修復術による不妊症への効果や周産期予後改善への期待が見込める結果となっております。近年の帝王切開率の増加に伴い、CSDiの患者さんや瘢痕部修復術の手術件数は増加すると考えられ、どのような患者さんに修復術をお勧めするべきか、より効果の得られる手術法などについて、さらに検討を重ねたいと考えております。

この記事をお読みになった方の中に、「前は生理がピタッと終わっていたのに、帝王切開の後から生理のキレが悪いのよね。」「うちの奥さん帝王切開したけど、前より生理痛が辛そうだな…。」「帝王切開の前は順調に子供を授かったのに、次の子はなかなか授からないなぁ。」という様な方がいらっしゃればCSDiという可能性も考えられますので、心当たりのある方はお近くの産婦人科でご相談してみてもよいかもしれません。

最後になりましたが、今回の発表に際しましてご指導くださいました産科婦人科学講座の横山良仁教授、福原理恵先生、様々なご高配をくださいました教室の先生方にこの場をお借りして心より感謝申し上げます。

横山良仁教授と

【受賞報告】日本女医会第69回定時総会

第9回溝口昌子賞を受賞

検査部　助教　皆川智子

二〇二四年五月十九日開催された、公益社団法人日本女医会第六十九回定時総会において、令和六年度の各賞授賞式が行われました。第四十四回学術研究助成を山谷文乃先生（兵庫医科大学医学部産科婦人科学講座講師、弘前大卒）が受賞され、私も第九回溝口昌子賞を賜り、大変光栄に存じます（写真）。

溝口昌子先生（聖マリアンナ医科大学皮膚科名誉教授）は教育、診療、研究に抜群のリーダーシップを発揮されたlegendです。平成二十五年に逝去された溝口昌子先生のご遺志により寄附された基金から、女性医師のキャリアアップと永年勤続を目的として溝口昌子賞が設立されました。私は、日本医師会女性医師バンク経由で検査部に異動、弘前大学男女共同参画推進室室員、臨床検査医学会ワークライフバランス・広報委員会委員、二〇二四

（次ページへ続く）

（前ページより）

四～当院の産業医を務めており、ご推薦頂いた青森県女医会：村岡真理先生、冨山月子先生はじめ、日本女医会会員の先生方に厚く御礼申し上げます。

青森県女医会では二〇二四年六月九日の総会で対馬ルリ子先生（女性ライフクリニック銀座院長、弘前大卒）にご講演を賜りました。青森県女医会の総会ではご講演後演者の先生を囲んでざっくばらんにお話しします。この形式を青森県医師会・弘前大学医学部男女共同参画セミナーも踏襲し、セミナー部分は医学科一年の「臨床医学入門」として、discussion部分は一年以外の学生や研修医も参加できる「さんかくダイアログ」として弘前大学男女共同参画推進室とコラボ開催しています。二〇二四年度は七月三日引地浩基先生、長谷川聖子先生のご講演後、十四のグループに分かれてグループディスカッションを行いました。参加者アンケートの結果は、満足度について「とてもよかった」四八・一％、「よかった」四二・七％（両者の合計九〇・八％）、参加前後の意識の変化について、ワークライフバランスや男女共同参画に関して「意識が上がった」六三・四％、「意識が少し上がった」二九・八％（両者の合計九三・二％）で、満足度、参加前後の意識の変化有ともに九割を超え、男女共同参画推進の意識啓発を図るという、本セミナーの目的を達することができました。ご協力頂いている青森県医師会、医学部、男女共同参画推進室、青森県女医会の皆様に感謝します。

日本女医会は、医学の発展・向上に寄与し、新たな挑戦を続け、キャリアアップを目指す女性医師の皆様を応援しています。微力ながらキャリア支援や働き方改革に尽力致しますので、今後もご指導のほどよろしくお願い申し上げます。

【受賞報告】2024年度日本麻酔科学会・第71回日本麻酔科学会年次学術集会

2024年度日本麻酔科学会 若手奨励賞 および 第71回日本麻酔科学会年次学術集会 最優秀演題賞を受賞

麻酔科学講座　助教　木下　裕貴

この度、二〇二四年度日本麻酔科学会若手奨励賞および第七十一回日本麻酔科学会年次学術集会最優秀演題賞を受賞しましたので御報告させて頂きます。

術後せん妄は手術をきっかけに起こる意識、注意、知覚の障害です。術後せん妄は確定的な発症機序や治療薬が存在せず、高齢者で多く発症することから本邦においては喫緊の課題であり、麻酔科領域でも非常にホットなテーマとなっています。私は麻酔科医となって以降、術後せん妄の研究に多角的に取り組み、今回二つの賞を受賞することができました。

日本麻酔科学会若手奨励賞は日本麻酔科学会において一年間に発表された論文のうち、三十七歳以下の若手研究者による最も優れた研究論文を発表した会員に授与される賞です。対象となった「The perioperative frontal relative ratio of the alpha power of electroencephalography for predicting postoperative delirium after highly invasive surgery: A prospective observational study」（Anesthesia and Analgesia誌掲載）は、食道癌や頭頸部癌再建手術といった長時間高侵襲手術における全身麻酔中の脳波、特にα波が術後せん妄を予測できるかを検討した論文です。本研究では全身麻酔中のBISモニターの脳波解析と血中の炎症性物質の測定を経時的に行うことで術後せん妄、脳波、炎症の三つの関係性を明らかにし、同程度の炎症がおこる手術では、術中の炎症の程度よりも術前の「脳の脆弱性」が術後せん妄の発症において最も重要であることを全身麻酔中の脳波α波の変化で示しました。

しかし、これは全身麻酔時の脳波を取得するまでわからないという制約があるため、より早期つまり患者さんの手術が決まった時点で術後せん妄のリスクを予測することができないかと考えました。そこで患者さんの周術期のカルテ情報を基にAIを使って術後せん妄推論モデルを作成し、術前の時点でも高い精度で術後せん妄を予測することができるようになりました。現在、社会実装としてICUにおける術後せん妄推論モデルに基づく非薬理学的介入の研究を看護師さんと共同で行っています。本内容について第七十一回日本麻酔科学会年次学術集会で発表し、最優秀演題賞を受賞することができた他、本学会ではシンポジストとしてこれまで弘前大学麻酔科学教室が取り組んできた術後せん妄に関する研究を発表することができ、私自身大変心に残る学会となりました。

最後になりましたが、これらの研究は多くの患者様や医療スタッフの方々の御協力によって成り立っています。本研究にご協力いただきました全ての皆様、そして御指導頂きました現青森県立中央病院院長の廣田和美特任教授、麻酔科学講座の櫛方哲也准教授をはじめ多くの先生方にこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。

岩木健康増進プロジェクト・プロジェクト健診、いきいき健診を終えて

健康未来イノベーションセンター　センター長　三上　達也
（先制医療学講座　教授）

新型コロナウイルス感染症が五類感染症に移行して一年が経過したこともあり、今年の岩木健康増進プロジェクト・プロジェクト健診、いきいき健診はコロナに振り回されることなく、予定通り無事終了することが出来ました。

【岩木健康増進プロジェクト・プロジェクト健診】（写真参照）

六月一日から十日までの十日間にわたって実施いたしました。これまで、岩木地区の住民、千人前後を対象に実施しておりましたが、今年は初めて岩木地区以外の弘前市民にも枠を広げ、募集人数も千二百人に増やしました。弘前市民枠は初日にすべて埋まるほどの人気で、締め切りを延長することなく千二百人の枠が埋まりました。

今年の目玉は、①睡眠波と②網膜の光干渉断層撮影（OCT：Optical Coherence Tomography）です。睡眠波は、今まさに脚光を浴びている検査で、麻酔科・薬理学の先生方のご協力のもと、OCTは、眼科の先生方とトーメーコーポレーション（名古屋市）の多大なご協力のもと実施したものです。いずれも参加者の方にとって有益であることはもちろん、研究面でも非常に貴重なデータになるものと確信しております。

この健診は、平成十七年に中路重之先生（当時：社会医学講座教授）が始められたもので、今年で二十周年を迎えることが出来ました。コロナ禍も含めて毎年実施することにご協力いただいたすべての皆様と参加者のご協力の賜物です。二十回すべてにご参加いただいている皆様（二十九名）には記念品と感謝状を贈呈し、十七回以上ご参加いただいている皆様（百三十二名）にも感謝状を贈呈し、喜んでいただくことが出来ました。

【いきいき健診】

五月二十二日から二十八日までの七日間にわたって実施いたしました。今年の対象者は平成二十八年に初回参加された皆様ですので、全員七十三歳以上です。ご高齢・衰弱を理由に健診会場に来られなくなる方が年々増えるのは残念ですが、会場に来られた方は皆様笑顔で、こちらも元気をいただきました。昨年・今年と胸部心臓血管外科学講座の先生方のご協力で超聴診器を用いたデータを取得しております。無症状の大動脈弁疾患の早期発見から手術に誘導出来た方が数名いらっしゃると伺っており、今後の展開が期待されます。

両健診とも、現在参加者への結果返却の準備をしております。今後、個別相談を含めた結果説明会、来年一月には市民公開講座（旧称：結果報告会）を予定しております。いずれも弘前市との共催事業ですが、献身的にご支援くださっている健康リーダーの皆様、看護師さんなどの有資格者の皆様（附属病院を退職された方にもお手伝いいただいております！）、学内の各講座、各参画機関の皆様のご協力に心から感謝申し上げます。来年以降も継続予定ですので、今後ともご協力いただけますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

第107回 弘前医学会総会 八戸で開催

弘前医学会庶務幹事　黒瀬　顕
（病理診断学講座　教授）

七月六日㈯午後、八戸市にて八戸市医師会と弘前医学会により、第百七回弘前医学会総会が共同開催されました。会場の八戸プラザホテルには六十四人の参加がありました。

総会長である八戸市医師会長熊谷俊一先生のご挨拶の後総会が行われ、令和五年度の会計および事業報告が承認されました。

その後一般演題十四題の発表に移りました。基礎研究や臨床研究、および臨床上有益な症例報告が行われ、それぞれの発表後には例年以上に質疑応答が行われ、その結果一般演題が三十分以上超過するという活発さでした。一般演題の後優秀発表賞選考が行われ、選考委員長の奥寺良之先生より弘前大学医学部附属病院整形外科佐々木勇先生の「脊髄損傷モデルマウスにおけるマウス間のコミュニケーションが運動機能回復に与える影響」が選ばれたと発表されました。これは雄マウスの運動機能が雌マウスの存在下で加速されるというとても興味深い内容で、総会長熊谷俊一先生より賞状と副賞が授与されました。次いで弘前医学編集委員長の高橋識志先生より令和五年度弘前医学会優秀論文賞に脳神経生理学講座古川智範先生の「Sex-related differences in the effect of exercise on protein profiles of serum in mice」が選ばれたと発表されました。これは弘前医学第七十四巻に投稿された十二論文より編集委員会によって選ばれたもので、運動が生物に恩恵をもたらす精緻な分子基盤を証明した優れた論文である点が評価されました。所用で欠席された石橋恭之会長代行として伊東健先生より賞状と副賞が授与されました。総会最後には八戸市立市民病院脳神経外科部長兼救命救急センター血管内脳神経外科部長の鈴木一郎先生による特別講演「青森県の脳血管内治療の現状と今後の課題」が行われ、救急現場の臨場感のあるお話を伺う事が出来、救急医療スタッフの取り組みが如何に生命救助に貢献しているかを改めて認識させられました。

その後隣室で行われたコロナ後初めての懇親会では参加者同士が冷えたビールと美味しいお料理を頂きながら歓談することが出来ました。八戸市医師会の皆様有り難うございました。

令和七年度第百八回総会は大館北秋田医師会にご協力戴き、令和七年六月二十八日（土曜日）に大館市プラザ杉の子で開催されます。皆様是非大館にご参集下さい。

なお、今回の総会で、功労会員を新たに設けることが承認されました。七十五歳以上で年会費を継続して十年以上納入していることが条件となり、功労会員は年会費が免除されます。また弘前医学は今後投稿料一万円を戴くことになりました。何卒ご理解の程をお願い申し上げます。

開会挨拶
（熊谷俊一 八戸市医師会長）

定時総会

特別講演　鈴木一郎先生

閉会挨拶
（伊東健先生）

第107回弘前医学会総会 優秀発表賞を受賞して

整形外科学講座　助手　佐々木　勇

このたび二〇二四年七月六日に八戸プラザホテルにて行われました第百七回弘前医学会総会において優秀発表賞を受賞いたしましたので、報告させていただきます。今回受賞した発表は「脊髄損傷モデルマウスにおけるマウス間のコミュニケーションが運動機能回復に与える影響」という演題でした。本研究は脊髄損傷モデルマウスの行動評価にUltrasonic Vocalization（USV）が有用であるかを検討し、その結果を報告したものです。USVはマウスのストレスやコミュニケーションによって発せられ、その回数などを評価するものです。本研究において、従来の運動・感覚評価は過去の報告と同様に脊髄損傷モデルマウスで有意に悪化していました。USVの発声回数そのものは非損傷モデルや椎弓切除モデルと比較して有意な変化を認めませんでしたが、脊髄損傷モデル群内でUSV発声回数が五回未満の群と五回以上の群に分けると、術後十四日においてUSV発声回数が多い群の方がマウス後肢運動障害の有意な改善を認めました。また、脊髄損傷モデルマウス単独でUSVを評価したsingle群と、異性マウスと一緒に評価したcouple群ではcouple群においてマウス後肢運動障害がより改善していました。これらのことから脊髄損傷モデルマウスにおいてマウス運動障害の改善とUSV発声回数が関連しており、臨床的には医療者と患者とのコミュニケーションが重要であると考えられました。現在は組織学的評価との関連を検討中です。

今回の受賞にあたり、ご指導を頂きました石橋教授、和田先生、熊谷先生をはじめ、弘前大学整形外科の先生方、先輩方に深く感謝申し上げます。これからも日々精進して参りますので、ご指導の程、何卒宜しくお願いいたします。

優秀発表賞
（熊谷俊一総会長、佐々木勇先生、奥寺良之選考委員長）

令和五年度弘前医学会 優秀論文賞を受賞して

脳神経生理学講座　助教　古川智範

この度は令和五年度弘前医学会優秀論文賞を授与いただき、心より感謝申し上げます。名誉ある賞を頂戴し、大変光栄であると同時に、身の引き締まる思いです。受賞した論文は、「Sex-related differences in the effect of exercise on protein profiles of serum in mice」というタイトルで、運動の負荷によって変動する血清タンパク質の性差について研究した結果を報告したものです。運動には、身体の機能障害やさまざまな疾患に対して健康効果があることが広く知られています。近年、運動によって発現が増加する分子（運動由来分子）が同定されつつあります。また、この運動由来分子を他個体へ投与することで、運動しなくても運動による健康効果を享受できることが報告されています。一方で、自発的な運動量や運動由来の代謝反応には性差があることも報告されています。これらの報告をもとに血中の運動由来分子の性差を調べることで、新たな運動由来分子の発見や健康効果発現メカニズムの解明につながるのではないかと考えたことが、本研究に着手したきっかけです。本研究において、マウスの活動量を計測したところ、雌マウスは雄マウスよりも自発的運動量が多い傾向を認めました。また、血清のプロテオーム解析の結果、運動によって変動するタンパク質が雌雄間で全く異なることを見出しました。今後、運動によって変動したタンパク質の投与による健康効果の発現機序、特に老齢マウスの認知機能改善効果の発現メカニズムについて追求していきたいと考えています。そして将来的には、様々な理由で運動することができない高齢者の認知症予防法の開発を模索していきたいと考えています。最後に、これまで貴重なご助言とご指導を賜りました先生方、および共著者の皆様に、心より感謝申し上げます。今後とも、変わらぬご指導とご支援を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

優秀論文賞
（伊東健先生、古川智範先生、上野伸哉先生、高橋識志先生）

令和６年度

鵬桜会総会に出席して

鵬桜会理事　今泉忠淳
（血管・炎症医学講座　教授）

令和六年五月二十五日、令和六年度の鵬桜会総会が、文京町の弘前大学五十周年記念会館において開催されました。澤田雅章常務理事（昭和六十二年卒・さわだ整形外科）の司会のもと、物故会員に対する黙祷を行い、その後、澤田美彦理事長（昭和五十二年卒・沢田内科）の挨拶がありました。つづいて、袴田健一弘前大学医学部附属病院長（昭和六十年卒）の挨拶があり、附属病院および弘前大学医学部・医学研究科での最近の取り組みなどが報告されました。議長には柿崎良樹常務理事（昭和五十四年卒・かきざき小児科アレルギー科）が選出され、八木橋勇治監事（昭和四十八年卒・やぎはし腎・泌尿器科）から監査報告、須藤武行常務理事（平成四年卒・聖康会病院）から決算報告、澤田雅章常務理事から庶務・事業報告がありました。今年も、昨年に引き続き、懇親会は行われませんでした。

鵬桜会の「鵬」は、「荘子」に出てくる、伝説の巨大な鳥のことです。「桜」は言わずと知れた日本一の弘前の桜のことです。「鵬桜会」という名称は、桜の名所である弘前大学医学部医学科の卒業生が「鵬」の如く活躍することを期待したものです。鵬桜会の主な活動は、母校弘前大学医学部への支援です。新入生および卒業生の歓送迎行事、各部活動主管の大会、総合文化祭の医学展、各講座の主催する学会、などへ助成しています。

弘前大学医学部医学科・大学院医学研究科・附属病院の学生や教職員は、例外なく、直接・間接に鵬桜会の支援を受けています。医学科・医学研究科・附属病院の構成員にとって、昨今の厳しい財政状況の中で、鵬桜会からの援助は本当にありがたいものであり、私たちはそのことを忘れてはいけません。今後、医療情勢を含めた日本の社会は、先が見えない状況が強まっていくことと思います。そんな中で、弘前大学医学部医学科の同窓生の縦横の絆は、大きな力となってくれるものと確信しています。

まだ鵬桜会に入会していない卒業生や教職員の方は、入会していただきたいと思います。また、学生のみなさんも卒業の暁には、鵬桜会の正会員として母校への支援に参加していただきたいと思います。

令和６年度

実験動物慰霊式

附属動物実験施設長　上野伸哉
（脳神経生理学講座　教授）

今年度は実験動物慰霊式を六月二十一日に執り行いました。慰霊碑に隣接した敷地にデータヘルスセンター（仮称）を建設中のため、今回は工事を中断しての開催となりました。猛暑の中をご出席いただいた皆様には心より感謝申し上げます。慰霊式に引き続き、基礎大講堂にて記念講演を開催しました。

本年は弘前大学大学院医学研究科皮膚科学講座准教授　松﨑康司先生にお願いし、「遺伝子改変マウスを用いた自己免疫性水疱症の病態解明」の演題にてご講演いただきました。高齢者に好発する自己免疫性水疱症は、皮膚の基底膜蛋白であるBP180とBP230に対する自己抗体による病態と考えられており、この病態解明のために抗BP230を自己抗体産生する新しい水疱性類天疱瘡モデルマウス、および免疫不全マウスを用いた動物実験を紹介いただきました。水泡症以外にも皮膚科疾患関連の遺伝子改変マウスが現在では数多く作製され、病態解明、生物製剤の効果の実証がなされる時代となり、私が学生の頃に学んだ皮膚科学とは隔世の感があります。

本講演に出席した医学科三年次学生にも、動物実験が医学や医療発展に関わる一面を知る良い機会となったことと思います。医学研究科附属動物実験施設も改修から早いもので四年が経ち、多くの遺伝子改変動物が飼養され、弘前大学での生命科学分野の研究において欠かすことのできない存在となっています。教職員の皆様には、今後とも動物福祉を考慮した動物実験の実施と、動物実験にかかわる学生へのご指導をお願いいたします。

令和６年度

弘前大学 成績優秀学生表彰

学務委員長　富田泰史
（循環器腎臓内科学講座　教授）

成績優秀学生表彰は、各学部（医学部は医学科、保健学科）の各学年で前年度の成績が優秀であった学生を表彰する取組みで、平成二十一年度にスタートし、今年で十六年目となります。

令和六年八月七日㈬に文京キャンパス・創立五十周年記念会館にて「教育に関して優れた業績を上げた教員・成績優秀学生」表彰式が行われました。福田眞作学長から一人ひとりに表彰状と副賞の盾が贈呈されました。学長からは祝辞とともに、今後も大いに活躍されることを期待している旨の激励のお言葉をいただきました。

成績優秀学生については前年度の履修科目の平均点等をもとに選抜され、医学部医学科からは五名の学生（現在二～六年次）が、大学院医学研究科からは一名の学生（現在の二年次生）が表彰されました。

学生諸君にはこの表彰を励みにさらなる発展を期待しています。

令和６年度
弘前大学医学部医学科・大学院医学研究科 成績優秀学生

医学部医学科２年　小倉　有貴
医学部医学科３年　花島　陽向
医学部医学科４年　小島　未穂
医学部医学科５年　小久保倫文
医学部医学科６年　廣野優希音
大学院医学研究科２年　江　涛

公益社団法人　青森医学振興会

【沿革】平成11年3月1日　弘前大学医学部医学科後援会鵬桜医学振興会発足（任意団体）
平成13年4月2日　社団法人青森医学振興会設立認可
平成24年4月1日　公益社団法人青森医学振興会へ移行認定

当会では、青森県の医学・医療の発展を促進するため、次の事業活動を行っております。
○医学教育活動の活性化を図るための事業への支援
○医学・医療の高度化に資する医学研究事業への支援
○地域医療の振興に寄与する事業への支援
○海外との学術交流等の活性化を図るための事業への支援

随時、会員の募集とご寄附を受付しております。
本会の公益目的事業に対する寄附金（年会費を含む）は、確定申告をしていただくことにより税制上の優遇措置の対象となります。
年会費は、下記いずれかの口座へお振込み願います。
なお、ご入会をご希望される方又はご寄附（年会費を除く）をされる方は、お手数ですが当会までご連絡をお願いいたします。ゆうちょ銀行については、専用の払込用紙を用意しております。

口座名	公益社団法人　青森医学振興会		
口　座	青森銀行　親方町支店　普通　1087485 みちのく銀行　大学病院前支店　普通　0198579 ゆうちょ銀行　口座記号番号　02200－4－57580		（お願い：振込手数料はご負担願います。） （お願い：振込手数料はご負担願います。） （専用の払込取扱票を利用の場合は、振込手数料は無料）
会　費	会員種別	年会費	
	医学部教員	1万円	
	医学部卒業生等	2万円	
	賛同する個人	2万円	
	賛同する団体	10万円	

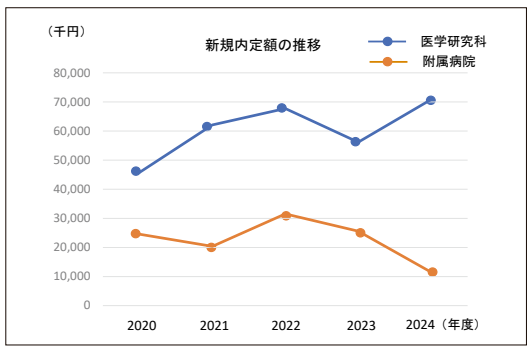
お問い合わせ　公益社団法人青森医学振興会事務局
TEL・FAX 0172-40-2872　E-mail：info@aomori-mpm.jp

令和6年度　科学研究費補助金採択状況

チャレンジ精神を持って不断の努力を！

（全学）研究委員会委員　伊東　健
（分子生体防御学講座　教授）

医学研究科および附属病院における令和六年度の科学研究費採択状況が公表されました。まずは新規交付内定額の年次推移のグラフをご確認下さい（いずれの年度も比較のために八月一日現在の時点での途中経過の値を使用しています。そのため研究活動スタート支援、海外連携研究（旧　国際共同研究強化(B)）は集計から除いています）。医学研究科における新規の交付内定額は昨年度に比べ一千五百万円ほど増加し、附属病院では一千四百万円ほど減少しました。医学研究科では、若手研究の採択数が減る一方で、学術変革領域研究が二件採択になったことが総額における採択額増加につながったものと思います。一方で附属病院では新規の採択率が七・九％と基盤Cと若手研究の両方でふるいませんでした。令和四年度からは採択率上昇を重視する方針から、職員全員に対する申請の義務は撤廃されましたが、それでも申請しないと採択されないですし、科研費採択総額や申請件数は大学評価や大学内組織評価に使用されます。申請書は指導教官がしっかり目をとおし、さらに多くの方に読んでもらって採まれることが何よりも大切なことかと思います。この記事が出る頃には、すでに令和六年度の科研費申請は終わっていると思いますが、不採択の場合にはわかった瞬間から次年度申請へ向けての準備をするよう心がけましょう。



○令和６年度科研費　申請・内定状況（新規）

部局名	申請件数	採択件数	採択率（%）	交付内定額（千円）
医学研究科	140	27	19.3%	70,850
医学部附属病院	89	7	7.9%	11,520
計	229	34	14.8%	82,370

○令和５年度科研費　申請・内定状況（新規）

部局名	申請件数	採択件数	採択率（%）	交付内定額（千円）
医学研究科	150	30	20.0%	56,160
医学部附属病院	102	15	14.7%	25,620
計	252	45	17.9%	81,780

○令和４－６年度科研費　研究種目別内定状況（新規）

研究種目名	医学研究科			医学部附属病院			合計		
	R4	R5	R6	R4	R5	R6	R4	R5	R6
基盤研究（S）							0	0	0
基盤研究（A）							0	0	0
基盤研究（B）	2	1	2				2	1	2
基盤研究（C）	20	17	18	7	9	3	27	26	21
学術変革領域研究（B）			2				0	0	2
挑戦的研究（開拓）	1						1	0	0
挑戦的研究（萌芽）		1					0	1	0
若手研究	7	10	5	12	4	3	19	14	8
研究活動スタート支援		1					0	1	0
特別研究促進費							0	0	0
研究成果公開促進費							0	0	0
特別研究員奨励費							0	0	0
奨励研究				1	2	1	1	2	1
合　計	30	30	27	20	15	7	50	45	34

「高校生手術体験セミナーin八戸」を開催して

大館・北秋田地域医療推進学講座
准教授　坂本　義之

二〇二四年六月八日、八戸市民病院講堂を会場として「高校生手術体験セミナーin八戸」を開催いたしました。青森県内の高校生に医学や医療に関心を持ってほしい、医療職を目指してほしいとの趣旨から本学所属ならびに県内の外科医が中心となり、二〇〇九年から青森市、八戸市、弘前市をはじめとした県内各地域で毎年開催してきたこのセミナーですが、コロナ禍の影響を受けて二〇二〇、二一年は中止を余儀なくされました。二〇二二年から周囲の強い希望もあり規模を縮小しwithコロナでの再開、昨年（弘前市）から通常開催となり、今年の八戸市開催に繋がりました。八戸高校、八戸北高校、三本木高校など主に県南地方の高校生に加え、青森高校や弘前高校、田名部高校などから五十五名＋見学者十名の計六十五名の高校生が参加し、スタッフとして県内研修医を含めた医師三十七名、医学生十名、協力企業関係者を含めて総勢六十名を越える皆さんにボランティアとして参加いただきました。オリエンテーションが済み、術着に着替えていよいよ手術体験プログラムの開始となります。今回は実際の手術室を再現した手術室体験コーナーや人体モデルを使った縫合コーナー、エネルギーデバイスなど手術機器体験コーナー、内視鏡外科手術、3D手術体験コーナーなど六つのブースを用意し、医師とのマンツーマンでの手技体験からチームでタスクを成し遂げる体験もあり、いずれのブースも活気にあふれていました。昨年から解禁となった本セミナー恒例の自動縫合器を使う際の「ファイヤー」の合唱も大盛況でした。

プログラム後半では参加者、スタッフともに緊張がほぐれてきて手技体験だけでなく、高校生からの何気ない質問や時に核心をつくような質問が出るようになり、参加した研修医、医学生も高校生に近い目線で話してくれていました。四時間に及ぶセミナーは終始和やかに進み、袴田健一教授、石戸圭之輔准教授からの修了証の授与で終了となりました。高校生にとっては身近な目標である医学生や研修医の皆さんとの触れ合いがものすごい刺激となり、今後のモチベーションアップにつながったと思います。この外科手術体験セミナーを通じて、一人でも多くの高校生が医学に興味を持ち、その道に進んでいただければこれ以上の喜びはありません。最後に本セミナー開催にあたりご協力いただいた多数の先生方、医学生の皆様、企業の皆様に心から感謝申し上げます。

学生だより

学生だより　弘前大学に入学して

弘前大学に入学して

医学科一年　植松　亮太

私は弘前大学に入学して、様々な地域の出身の人と関わるようになった。

私はこの弘前という地に縁もゆかりもない場所から来たが、私の周りにも私と似たような境遇の人が多く居て、仲間意識を持つことができ、多くの人と打ち解けることができた。その際に、私は地域ごとで言葉のイントネーションや使い方がかなり違うことを痛感した。私の家が決まった後、配管工の方々と話す機会があったのだが、その人たちの話す言語がそれはそれは流暢な津軽弁であったので、何を言っているかがほとんど聞き取れず、私はそのとき適当に相づちを打ってごまかしてしまった。その他にも、チーム分けなどに使われる定型文に違いがあったりして、よく混乱することがあったのが印象的だ。

そしてこれは弘前大学に限った話ではないと思うが、私は大学に入って自己管理を徹底しなければならないと感じた。高校の時とは違い、欠席する際の連絡を入れなければならない授業は極めて少なく、大学に行くも行かぬも自分次第であるため、自由で楽だと考えられる一方で、規定の回数以上を出席しないと単位を落とす危険があることから、大学では、自立し、自律しなければならないと考えさせられた。

弘前大学の立地の影響もあり、青森県外から来た人たちは弘前大学の付近に住んでいる。これは弘前大学の生徒にとって大変喜ばしいことだと思う。大学に入って初めて一人暮らしを経験する人が大半であるため、不安だと感じる人が多くいると思うが、そのような状況下で、友人の家にどんな時でも簡単に訪れることができるということは心の支えとなると思うし、実際、私が寂しいと感じた時は、友人の家に訪れて談笑することが多くある。これは私が弘前大学に入ってから気づいた大きなメリットだと考える。

私はこの地に来てまだ慣れないことも多くあるが、この大学で友人たちとともに学び、成長していきたいと強く思う。

コラム　医学部こぼれ話…

医師の働き方改革がいよいよ始まった。質の高い医療を担保しながらも、医師の健康を維持しようとするもので、医師本人のみならず医師の家族にとっても非常に大きな改革である。筆者が医師になった頃、諸先輩方は土日も朝回診を欠かさず、子供たちの行事にもほぼ参加出来ていなかったようで、父の日の作文に「私のお父さんは、いつもうちにいません。」と書かれ、非常にバツが悪かったようである。先輩方のお話を反面教師としたわけでもないが、土日の朝回診・時間外の急患対応をグループ診療による当番制として、なんとか家族の行事に参加してきた私たちの年代にとっても、今回の働き方改革は隔世の感がある。

「やることがなくても二十二時までは医局にいるように」（＝当直医の急患対応を見ると勉強になるし、当直医の話を聞くだけでも勉強になるから。）と言われて育った私たちが、「やることが終わったら早く帰るように。」と真逆の事を言わなければならなくなったのだから。

文字通り「身を粉にして」弘前大学医学部附属病院と医師不足で困っている地域の医療を支えてきたように思うが、これからは医師全員で自身の「身を守りながら」質の高い医療を支えていけることを心からお祈り申し上げます。

学生だより　解剖学実習を終えて

弘前大学に入学して

医学科一年　木村雪花

弘前という伝統ある土地で、念願叶って医学を学べることを心から嬉しく思います。私にとって友人のいない環境への進学は初めてであり、合格発表後から授業開始まで、何度も学務へ確認の電話を掛けました。持ち物や服装など細かい質問に丁寧に答えていただき、とても心強かったです。ありがとうございました。

弘前で四か月を過ごして感じるのは、とても住みやすい街だということです。街の人々はにこやかで、乳幼児連れの家族もよく見かけます。また、自然も豊かで、通学中に様々な動物を目にして癒されています。弘前は雪が多いと聞いているので冬季の通学は少し心配していますが、今のところ湿度が低く過ごしやすいです。

入学してすぐの講義で先生方から、部活動・サークル活動を含めたいろいろなことに挑戦するように薦められました。実際、同期の多くが一つ以上の部・サークルに所属しています。私は剣道部に入部しました。持病により通学に不安があるため、ほかの同期より入部が遅れましたが、同期・先輩に優しくしていただき、体調と相談しながら稽古に参加しています。

基礎ゼミナールでは病理生命科学講座に配属されました。私にとっては前期で最も医学科生である実感を持って楽しんだ講義です。標本の作製・観察や人体組織の観察、滅菌手袋の装着、外科縫合の体験など本当にいろいろなことを経験させていただきました。鬼島先生は新潟県人会、吉澤先生は剣道経験者とのことで、早期に先生方との共通点が見つかったことも講義内容を身近に捉えることができた理由の一つだと思います。この講義で学んだことにこれから学ぶ専門的な知識を結び付けることで、学習内容を確実に自分のものにしていきたいです。

前期は教養教育科目が大部分を占めていましたが、後期からは教養教育科目に加えて組織学と生化学、医学英語が始まります。父や祖父母、祖先のような町医者になるため、弘前でこれから一層勉学に励みたいです。

解剖学実習を終えて

医学科二年　石岡佑紳

―「ご遺体は最初の『患者』であり、最高の『師』でもある」―

この言葉は、解剖学実習に臨む私たちに下田教授が伝えてくださった言葉です。実習を終えた今では、この言葉に込められた「解剖学実習が私たち医学生にとって如何に重要な意味を持つか」「どのような態度で実習に臨むべきか」というメッセージに、私なりの考えを持つことができるようになったと実感しています。

実習が始まる前には、人体の神秘に触れる高揚感、ご遺体にメスを入れる罪悪感、座学と実習が並行して進んでいく過密なスケジュールに対する不安など、さまざまな思いがありました。しかし、実習が進むにつれて、ご遺体の様子から生前の過ごし方が少しずつ分かり、医学の発展のために献体をされたという崇高な志をより身近に深く感じることができるようになったことで、実習当初に抱いていた罪悪感や不安感は消え去り、むしろ、ご遺体の思いに応えるためにしっかりと学ぼうという覚悟と責任感が芽生えました。そして、知れば知るほどもっと詳しく知りたくなり、その分、疑問も出てくるようになりましたが、ご遺体はその全てに丁寧に答えてくださりました。実習最終日まで全力で学ぼうと取り組み、私ができる限りの知識を身につけたという自負があります。

実習期間中は、身体面・精神面共に辛い時期もありましたが、ご遺体から教わる知識が原動力となり、最後まで頑張ることができました。解剖学実習で身につけた知識は、他の科目を勉強する際の土台となっています。そして、献体をされた方の思いに応えるために立派な医師になろう、と精神的にも良い変化がありました。今後も、継続して努力してまいります。

最後に、全ての医学の基盤となる解剖学をその身を持って教えてくださった最高の師、献体に協力してくださったご遺族、そして準備、指導など解剖学実習を行うために尽力してくださった全ての方々への感謝のことばを伝えます。本当にありがとうございました。

解剖学実習を終えて

医学科二年　稲村柚里香

四月から三ヶ月間行われた解剖学実習では、医学的知識だけでなく精神的な学びを得ることができ、私自身一回り成長できたと感じています。

医学的な学びとして、ご遺体には多くの個人差があることを知りました。また、臓器と膜との位置関係や血管と神経の交叉を立体的に把握し、臓器の溝やくぼみを触覚的に理解できました。これらは解剖学実習でしか得られない貴重な経験でした。

多くの先生方が「医師になって何十年経っても解剖実習のことは忘れない」とおっしゃいますが、私も、最初の患者さんであり、解剖学の先生でもあるご遺体のことは一生忘れないと思います。私は「今日もよろしくお願いします」とご遺体の手を握ってから実習を始めていました。初めは自分の不甲斐なさに身がすくみましたが、学ばせていただくと決意してからは真剣にご遺体に向き合いました。この方はかつて産声を上げ、大切に育てられ、学生時代を過ごし、仕事を始め、大切な人と出会ってきたのではないでしょうか。人生の様々な場面で、この方の呼吸や動作は精緻に張り巡らされた血管や神経や筋肉により支えられ、ときに笑顔が人生を彩ったことでしょう。医学生にとって最初の患者さんであるご遺体の人生に思いを馳せたことで、将来医師として患者さんに向き合うときにも、病気の向こう側にある患者さんの過去や現在の生活、患者さんの気持ちなどを想像したいと感じました。近年、特定の部位や疾患だけを診るのではなく、患者さんの心理や社会的側面を考慮しながら個々人に合った診断や治療を行う全人的医療が注目されています。解剖学実習を終えた今、私は、ご遺体が教えて下さった「患者さんの人生を想像すること」を生涯胸に刻みたいと考えています。ご遺体を提供して下さった方とご家族の尊意に応えるためにも、患者さんの人生を思いやり、病気に向き合う医師になる覚悟を決めました。この決意を全うするべく、真摯に勉学に励んでいきたいと思います。

解剖学実習を終えて

医学科二年　山中麻里江

執刀式の日、初めて白布に包まれたご遺体を前にして、今から解剖が始まるのだと気を引き締めたことを覚えています。あの光景を、一生忘れることはないと思います。

解剖学実習が始まったばかりの時期は、日々講義で増えていく膨大な量の知識に圧倒され、目の前の構造を捉えるので精一杯でした。実習が進むにつれて、自分の中で知識を体系化することで道筋を立て、血管走行や臓器の配置などの立体構造を理解できるようになりました。ただテストのために暗記するのではなく、解剖学で正常とは何かを理解したその延長線上に、臨床や研究があるのだと意識するようになりました。

自分の目でアトラスや実習書の図と見比べ、自分の手で触れたことで、破格の存在や病気の痕、生活の痕など、座学だけでは知り得なかったたくさんのことを学ぶことができました。ご遺体の身体の体表から内部の隅々まで見て、人体の成り立ちを知り、生命の神秘さえも覚えました。

実習が進むにつれて、私は「なぜこの方は亡くなったのか」という疑問を持つようになっていました。人の死にこんなにも真剣に向き合ったのは初めてでした。解剖実習は医師への第一歩であること、自分がその一歩を歩み始めたことを実感しました。ご遺体は私にとって最初の患者さんで、生涯の師です。私の学びたいという意欲に、どこまでも、惜しみなく応えてくださいました。

最後に、この解剖実習は、私一人の力では乗り越えられなかったと思います。

（次ページへ続く）

写真コラム（25）　弘前保健所

血管・炎症医学講座
教授　今泉忠淳

保健所は、地域の公衆衛生を担う重要な施設です。保健所は、感染症、結核、難病、精神保健、薬事、食品衛生、環境衛生、地域保健、母子保健、など広範な業務を担当しています。平時には、保健所の仕事はあまり目立ちませんが、2019年に発生した新型コロナウイルス感染症のパンデミックでは、地域の保健所が感染状況の把握を行い、非常に大変だったそうです。新たな病原体によるパンデミックは今後も発生すると予想されていますので、保健所の感染症対策に関する機能を強化しておくことは、重要な課題と思います。

弘前保健所は、青森県が設置している６カ所の保健所のうちの一つです。青森市保健所と八戸市保健所は、それぞれの市が設置しています。弘前保健所は、以前は、弘前中央病院のそばの吉野町にありました【写真１】が、平成27年（2015年）に、弘前公園のお濠端の下白銀町の青森県弘前健康福祉庁舎へ移転しました。

【写真１】旧弘前保健所．2012年

吉野町の跡地は、現在は更地になっています。ここからは、弘前大学医学部附属病院の上に岩木山を見ることができます【写真２】。

【写真２】旧弘前保健所跡地．2023年

（前ページより）

す。貴重な学びの機会をくださったご遺体とそのご家族、また、解剖学実習を通して関わったすべての方々に感謝しています。この御恩を返せるように、立派な医師になりたいと思います。それが、私の責任であると感じています。その身を挺して我々のためにとご献体された先生方の崇高な志を深く尊敬し、学びを社会に還元できるよう精進していきたいと思います。

解剖学実習を終えて

医学科二年　坂田陽菜

初めて解剖室に入るとき、私は緊張と不安を抱いていました。「人間の体を解剖する」と普通経験し得ないことを未熟な自分にできるのか自信がなかったのです。しかし、その緊張と不安はご遺体と対面した瞬間に消え去りました。自分でも不思議なほど冷静で、かつ「解剖させていただくからには、私のできる限りを尽くして学ばなければならない」と心の中で使命感に燃えていました。それと同時に「私が本当に医師になるのだ」という自覚が芽生えたのも感じました。最初は私を含めて班員全員が辿々しい様子でした。

しかし解剖実習が進むにつれて、各々責任感と学べることを全部学ぼうという積極的な姿勢に変わっていきました。きっと他の人も自分が医師になるのだという自覚が解剖実習を通して生まれたのだと思います。

実習が本格的に始まってからは学びの連続でした。教科書だけではわからない、実際の骨の動き方や筋肉の起始停止の位置、破格などを実際に自分の目で見ることによって深く理解することができました。ご遺体を解剖させていただくことで、体の仕組みを学ぶ以外にも様々なことを学ぶことができました。

最後に、私たち医学生が医学を学ぶためにご献体して下さったことに感謝申し上げます。自分が献体する立場に立って考えた時に「献体する」という選択をするのはとても勇気のいることだと感じました。献体して下さったご本人はもちろん、そのご遺族の方も並々ならぬ思いだったことだと思います。そのような思いがあったうえで、ご献体してくださったことを考えると感謝してもし尽くせません。ご遺体を解剖させていただいて医学を学んだ私たちは、その思いを受け止めて、医師として沢山の患者さんのためになる努力をし続けなければならないと決心しました。

今後、今回の解剖実習での経験や決意を忘れずに心に留めて立派な医師になるための不断の努力を重ねていきたいと思います。私たちに沢山のことを学ばせていただき、本当にありがとうございました。

解剖学実習を終えて

医学科二年　田中佑奈

今回「解剖学実習を終えて」を寄稿させていただきました。私は東京理科大学薬学部薬学科出身で、十年近く保険薬局の薬剤師として働いていました。学士編入した二学年の前期初めからすぐに解剖学実習がスタートしました。解剖学実習は、医学部生活の幕開けとしてふさわしいと感じました。めまぐるしい社会人生活から一気に厳かな空気になり、背筋が伸びる気持ちでした。また、下田教授の言葉で、医師になるという覚悟を改めて身に刻むことができました。勉強だけではなく、医師として患者やコメディカルに対する姿勢や礼節などについても語っていただきました。教授は「ご遺体は君たちにとって最初の患者さんであり、先生である」とおっしゃっていました。本当にその通りで、ご遺体は、座学では学べないような事をたくさん教えてくださいました。教科書では臓器の配置や構造などは平面的な絵図や言葉の知識として学習しますが、実際の臓器を見て手で触ったり、どこにあるか体の中を探ったりするとイメージしていたものと全く異なっていたりします。例えば、腎臓は想像よりも頭側にあったし、実質臓器である肝臓や腎臓は握るととても固く、中に細胞がぎっしり詰まっているのが分かりました。心臓は、何重にも手厚く膜でラッピングされていました。血管や神経は、美しく並走して植物の根のように体の隅々まで伸びていました。

ご遺体の体の関節を外し離断していく過程は、まるで精巧な機械を分解するようでした。一つの動きをするのに様々な筋肉、骨、関節が協力して動いているのを知り、感動を覚えました。解剖学実習は拘束時間も長く勉強量が多くて大変でしたが、毎日が本当に驚きと感動の連続で充実した毎日でした。教授は最後に大事なことを教えてくださいました。「ご遺体の離断が進んで体がバラバラになると、私たちの脳は人としてではなくモノとして認識してしまう。更に実習が進むと慣れが生じて、気がゆるんでヒトではなくモノを扱うように雑になってしまう。君たちはご遺体の先生方に対して最後まで敬意を払う事を忘れないように。」その言葉の通りで、私たちは医師として、命に対する畏敬の念は忘れてはいけないと思いました。そして目の前の患者に対して全力で向き合う姿勢も大事であるとこの実習で学ばせていただきました。下田教授、そして渡邉先生、千葉先生、白戸先生、解剖学実習に関わった全ての方に感謝いたします。

学生だより

クリクラについて

クリニカルクラークシップ前半を終えて

医学科五年　上野裕貴

今年三月から始まったクリニカルクラークシップでは、座学で得られなかった

多くの学びがあり非常に刺激的です。過去に別の病院でボランティア活動をしたことがありますが、今回の実習はそれとは全く異なり、実際に医療の現場に立ち、医療者の一員として責任を持ちながら学んでいます。

これまで友人や模型を相手に模擬的に行っていた手技を実際の患者さんに行うことで、技術を身をもって学ぶことができています。これらの経験は将来の糧となり、臨床の場で決して無駄にはならない重要なものだと実感しています。

しかし、実習を通じて医療者に求められる能力が単に手技を習得することにとどまらないことも痛感しました。全ての実習にいえますが、特に青森県立中央病院での実習を通じてそれを強く感じました。この五ヶ月間で青森県立中央病院の産婦人科、血液内科、呼吸器内科の三つの科で実習をさせていただきましたが、悪い知らせを患者様に伝える場面に立ち会うことも少なくありませんでした。そんな中、先生方は医学的な妥当性を損なわず、患者様やその家族が次のステップに進むための計画を立て、丁寧に説明する姿が非常に印象的でした。

医療者に求められるのは手技のような目に見えるものに留まらず、患者や家族とのコミュニケーション能力や、医療の全体像を理解する能力を含むことを強く認識しました。しかし患者様の病状を医学的に学ぶことに精一杯で、「もっと勉強をしておくべきだった」と感じることが多々あります。実際、ある先生から「君はまだ医師の真似事をしているだけで、患者さんを診ているわけではない」と言われたことが、私の未熟さを痛感させました。

夏季休暇後の後半の実習では、さらなる努力を重ねて挽回したいと考えています。貴重な学びの機会を提供してくださっている患者様やご家族、指導してくださる先生方や看護師、そして医療従事者の皆様に深く感謝いたします。

クリニカルクラークシップIでの学び

医学科五年　倉本莉名

三月にクリニカルクラークシップが始まり、早くも五ヶ月が経ちました。クリニカルクラークシップIも折り返しに近づいてきた中で、いくつか実感したことがあります。

まず一つ目は、縦断的に学ぶ重要性です。クリニカルクラークシップでは、担当患者さんが割り振られ、毎日の診察を行い、カルテを記載することが多いです。診察所見・検査所見から病態を考え、今後の治療方針を考える過程を通じ、考え方という基盤を少しずつ身に付けることができています。一人の患者さんについて知識と知識を結び、単語から文脈、そして文章を作るという動的かつ縦断的な学びによって、少しずつ視界が広がっていることを実感しています。

二つ目は、横断的に学ぶ重要性です。今までに十四の診療科で学ばせていただきましたが、一つの疾患について複数の科で、それぞれ異なる観点から学ぶことが多々ありました。他科で学んだ知識に、新たな科で学んだ知識を足していく。そのような横断的な学びは知識の幅を増やすことができるだけではなく、新たな考え方の獲得、つまり動的な学びにも繋がっています。

三つ目は、人から学ぶ重要性です。クリニカルクラークシップでは人と関わることが多く、人との繋がりの中で学ぶことが増えま

（次ページへ続く）

弘前大学大学院医学研究科

第7回 若手研究者紹介動画

医学研究科では、各講座で研究されている40歳未満の若手研究者に、現在取り組んでいる研究内容や、研究を志したこれまでの経験を自ら紹介いただくことで、他の若手研究者や学部学生の研究に対する意欲を養うことに加え、紹介した若手研究者自身のモチベーションを向上させることを目的として、「研究者紹介動画」を作成・公開する取り組みを始めました。

第7回目はゲノム生化学講座の畑　貴之（はた　たかゆき）先生。『遺伝子のプロモーターは、どのようにして生まれるのだろうか？』をご紹介いたします。

助教　畑　貴之
（ゲノム生化学講座）

医学研究科ホームページで公開中！

紹介動画はこちら　↓

（前ページより）

した。例えば医療スタッフの方々からは、心身の健康を守る責任感や医療従事者としてふさわしい姿勢を学んでいます。ともに実習を行っている班員は皆それぞれの目標に向かって努力しており、刺激を受ける日々です。何より患者さんが私たち医学生の診察や問診を許可してくださり、担当患者さんとなってくださることが人との繋がりの中で学ぶことの最たる例だと思います。人と関わることで初めて学べることがあること、それらが医療従事者としてだけではなく、人間として重要であることを実感しました。

笑顔を創ることができる医師になれるよう、人との繋がりの中で縦断的な学びと横断的な学びを重ね、人間としての深さと幅を増してゆくことを目標に頑張ってゆく所存です。ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

若手教員・医師だより

耳鼻咽喉科・頭頸部外科講座　助教　野村彩美

耳鼻咽喉科頭頸部外科医として九年目を迎える野村彩美（あやみ）と申します。この度、本誌に寄稿させていただく機会を得ましたので、自己紹介と耳鼻科の魅力についてお話しいたします。

私は青森市出身で、弘前大学を卒業後、青森県立中央病院での初期研修を経て当医局に入局しました。その後、大学病院、青森県立中央病院、大館市立総合病院で勤務してきました。趣味は旅行やライブに行くことで、高校生の時からずっとゆずのファンです。もし同じファンの方がいらっしゃいましたら、是非お声がけください。

五年生を終えて将来の進路を考えた際、自分で診断から治療まで一貫して行いたい、癌治療にも携わりたい、そして老若男女問わず診療したいと考えました。初期研修で耳鼻科をまわった際に、これらの希望を全て満たすことが出来る科だと実感しました。また、ダイナミックな手術から顕微鏡を使った繊細な手術まで、多彩な手術にも魅了されました。何より優しくて気さくな先生方が多い医局の雰囲気にも惹かれ、入局を決意しました。実際、毎日和気あいあいと働けており、この選択が正しかったと感じています。

耳鼻咽喉科は耳科、鼻科、頭頸部腫瘍、アレルギー、難聴、めまい、嚥下、音声など多岐にわたる分野をカバーしています。頭頸部癌や急性期の気道病変など、命に直結する疾患の患者さんから、ＱＯＬの低下に悩む患者さんまで幅広く診療します。私たちが日常的に行っている「話す、聞く、食べる、においをかぐ、味を感じる」といった行為が出来なくなると、コミュニケーション障害による精神的なダメージが生じ、食事の楽しみが奪われ、危険信号を察知できなくなるなどの問題が生じます。彩美という名前は、「周りの人を彩り美しく出来るような人になってほしい」ということで名付けられたようですが、私は耳鼻科医として、日常生活に直結する基本的な機能の障害で困っている患者さんをサポートし、生活に彩りや楽しみを提供し、当たり前の日々を取り戻すために尽力したいと思っています。

個人的には、大学所属の耳鼻科の上級医が少ないということもあり、他の先生方にご指導いただきながら病棟グループを担当させていただいております。最近では学会でのシンポジウムなど、責任ある発表を任される機会も増えてきました。まわりを見渡すと同級生や年齢の近い先生方もサブスペシャリティの資格取得や、国内外への留学など日々スキルアップを図っている方が多くいらっしゃいます。私も今年アレルギー専門医となることができましたが、気が付けば中堅医師と呼ばれる頃となってきていますので、いつまでも上級医に頼るのではなく、自主的に勉強やスキル取得に努め、後輩の指導もできるように努めなくてはいけないと日々痛感しています。これからも周りの方々と助け合い、時に切磋琢磨しながら、日々精進して参ります。

若手教員・医師だより

循環器内科、腎臓内科　助教　鹿内駿

循環器腎臓内科の鹿内駿と申します。弘前大学を卒業後、青森県立中央病院での初期研修を経て循環器内科に入局しました。学生実習でカテーテル治療、特に心筋梗塞に対するカテーテル治療である経皮的冠動脈インターベンション（ＰＣＩ）に魅力を感じ、現在もＰＣＩや下肢動脈疾患に対するカテーテル治療を中心に循環器診療に取り組んでいます。カテーテル治療を行う上での大きな目標は低侵襲かつ安全で患者様に満足していただける治療を提供することであり、より良い治療を目指し日々学びながら診療を行っています。

この度、大学院や市中病院勤務を経て今年度から弘前大学病院に赴任しましたが、最近の取組の一つとして狭心症や心筋梗塞に対する「ステントレスＰＣＩ」を紹介させていただきます。ＰＣＩにおいてステント留置の有効性は確立した治療であることは間違いありません。一方、ステントを留置せずに血管の内側に薬剤塗布を行うDrug coated balloon（ＤＣＢ）を用いた治療は、もともとはステント内再狭窄や小血管が対象でしたが、二〇二三年より全ての冠動脈病変に使用可能となり、一部の病変ではステントと同様に有効であることが知られています。狭心症や心筋梗塞では血液をさらさらにする抗血小板剤が不可欠であり、また、ＰＣＩを受けた患者様はステントの有無に関わらず一定期間は抗血小板剤を２剤服用する必要があります。他の病気や手術で休薬が必要な場合、２剤服用期間の短縮が必要な際には、ステントレス治療では抗血小板剤中断の弊害が起こりにくいことが利点の一つです。

カテーテル治療のお話が長くなってしまいましたが、循環器内科では狭心症や心筋梗塞といった虚血性心疾患、不整脈、弁膜症等様々な分野があり、それぞれカテーテルやペースメーカー等の侵襲的治療、薬物治療、心臓リハビリテーション等幅が広いことが特徴の一つです。これから病院実習や初期研修を控えている学生の皆様には、少しでも循環器診療に興味を持って頂けたら幸いです。

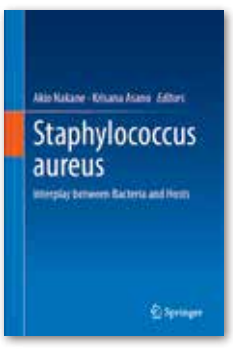
これからもより良い医療が提供できるように精進して参ります。引き続きよろしくお願い致します。

書籍のおしらせ

「黄色ブドウ球菌の最新知見を網羅した基礎研究の書」

生体高分子健康科学講座　特任教授　中根明夫
感染生体防御学講座　教授　浅野クリスナ

この四月にSpringer-Nature Singapore社から、私どもが編集した「*Staphylococcus aureus* -Interplay between Bacteria and Hosts」が発刊されました。Springerから黄色ブドウ球菌に関する著書の刊行を依頼され、感染の基礎である病原体と宿主の攻防に焦点を当てた書にすることにしました。二〇一九年秋から選定した著者に執筆依頼をしましたが、COVID-19のパンデミックが始まり、感染症対策で忙殺される執筆者もおり、原稿が集まらず編集がままならない三年間を経て、やっと今春発刊にこぎ着きました。ドイツのフレードリッヒ・レフレル研究所Becker教授に本菌の定着・持続感染の分子機構、アイルランドのトリニティ大学Foster教授に本菌表層タンパク質と宿主細胞の相互作用、北里大学胡東良教授に本菌が産生するスーパー抗原毒素など外毒素の機能、麻布大学佐藤祐介博士に本菌病原因子とその遺伝子制御・ワクチンに関するトピックに最新知見を交えて紹介いただきました。加えて、中根が本菌と宿主の免疫学的攻防、浅野が本菌の免疫逃避とオートファジーについて解説しました。本書が、ヒトの常在細菌となり得る黄色ブドウ球菌を例に病原体と宿主の調和・攻防の知見を提供し、多くの研究者にとって有益な書になることを願っています。



「ニューモシスチス肺炎のすべて　改訂第２版」

呼吸器内科学講座　教授　田坂定智

このたび「ニューモシスチス肺炎のすべて 改訂第２版」を刊行しました。ニューモシスチス肺炎は細胞性免疫不全の患者さんに好発する日和見感染症の一つです。以前はＡＩＤＳの合併症という認識でしたが、近年の移植医療の進歩に加え、免疫を修飾する薬剤が様々な疾患の治療に用いられるようになったことから増加傾向にあります。内科以外の先生でも生物学的製剤などの免疫抑制治療や臓器移植に携わる方は常に遭遇する可能性のある疾患と言えます。二〇一四年に初版を発行したところ、予想外の反響をいただきました。その後、本症の診断、治療において多くの新知見が報告されたため、今回の改訂版の刊行に至りました。執筆者は診療の第一線で活躍する呼吸器内科医、感染症医、集中治療医の先生方で、実際の症例も豊富に掲載されています。生物学的製剤や免疫抑制療法を行う先生、移植医療に従事されている先生にお手に取っていただきたい一冊となっています。

腫瘍内科学講座

腫瘍内科学講座　教授　佐藤　温

近年の分子生物学の飛躍的な進歩により、専門的な知識や技能を要する薬剤が次々と臨床導入されるようになりました。質の高いがん薬物療法を実践するためには、幅広い臓器のがん薬物療法を専門的に実施することが要求されるようになりました。そこで、臓器横断的に薬物療法を専門に行う部署として、平成二十年一月に初代教授西條康夫氏が着任して、大学院医学研究科腫瘍内科学講座および附属病院腫瘍内科が新設されました。平成二十四年七月より二代目教授として私が着任し、現在に至っております。

当講座は、専門的な薬物療法の実践とともに、患者さんひとりひとりの診断時から看取りまでの時間縦断的な全人的診療を信条としております。大学人としての使命である科学的根拠の創造への邁進と同時に、理論化できない「物語り」の領域を大切に育てることを重要視しております。現在教授一、助教一、病院助手一の計三名に加え、講座受付事務一名、CRC一名で構成しております。昨年度は一年間、昭和大学病院より後期研修医の鈴木梨沙子医師が本講座に加わり、大変充実した業務を行うことができました。また、教室員の斎藤絢介医師、陳豫医師の両人ともに、がん薬物療法専門医を取得されました。研究は、基礎医学との連携及び臨床研究が中心となっております。

診療業務では通常診療の他、がん診療を横断的につなげる役目を務めています。病院外来化学療法室および化学療法プロトコール管理の統括を行う診療科としての責務を果たし、各科参加型で治療方針を決定できるシステムとして、平成二十七年三月から「キャンサーボード」を放射線治療科、放射線診断科及び各担当主科と協同して定期開催（毎週月木曜日夕方）、令和四年十月からは、医師、看護師、薬剤師、理学療法士、栄養士、心理士、医療福祉士らが一同に会して行う「がん患者支援のための多職種カンファレンス」（毎月第二月曜日夕方）を開催しております。さらに、令和元年九月に厚生労働省より「がんゲノム医療拠点病院」に指定を受け、令和二年三月より定期開催している「エキスパートパネル」（毎週水曜日夕方）では、がんゲノムプロファイリング検査の結果を、基礎医学を含む大学全体のゲノムの専門家の医療者らと医学的解釈の検討をしております。これらはすべて、学生を含む医療関係者に公開されておりますので、学習の場として是非ご参加いただければと思います。

教育面では、卒前教育として平成二十四年度から、医学部四年前期に腫瘍内科学講義を年間十五コマ担当し、平成二十九年度からは、医学部四年後期に臨床実習入門「医療コミュニケーションスキル実習」を年間十コマ担当しております。実習では、医療面接のレベルに止まらず、研修医以上のレベルとなる「悪い知らせを伝える」に踏み込んでおりますが、学生たちの吸収力には驚くばかりです。医学部五・六年のクリニカルクラークシップは、消化器血液免疫内科学講座の先生方と協同のプログラムで担当させて頂いております。

また、文部科学省採択プログラム「東北広域次世代がんプロ養成プラン」（東北大学主管）において、「地域がん医療次世代リーダー育成コース」大学院コースを本年度から開設しております。本コースでは、がん専門医の習得のみならず、地域がん医療のリーダーとなる次世代のがんに関わる医療人を育成することができる人材の養成を目標としております。他科の大学院生も応募できますので、是非気軽に申し込んでください。

神経精神医学講座

神経精神医学講座　教授　中村和彦

神経精神医学講座は、歴史的には国内有数のてんかん研究機関として認知されてきました。現在では児童精神医学を中心とした研究に加え、臨床薬理や分子遺伝学的な病態解明の他、疫学、精神疾患患者の身体合併症など研究は多岐に及んでいます。また、精神疾患は「五大疾病」のひとつになり、職場でのうつ病や発達障害、高齢化に伴う認知症やその周辺症状の問題など、精神科の患者数が年々増加しています。精神疾患は国民に広く関わる疾患として重点的な対策が必要とされ、その中で当講座が国内外及び地域医療において果たすべき役割も大きくなってきています。

臨床面では基本となる精神療法を踏まえつつ、標準的な薬物療法、治療抵抗性統合失調症に対するクロザピン治療、修正型電気けいれん療法などを行い、治療効果を上げています。また、標準化治療でも改善の乏しい難治例を、地域の診療機関から積極的に引き受けております。加えて薬物療法のみならず、うつ病や摂食障害に対する認知行動療法、PTSDに対するEMDRなどエビデンスに基づいた精神療法を取り入れた、患者さんを中心とした多角的な治療を推進しております。さらにせん妄などへのリエゾン・コンサルテーション、緩和ケア領域でのニーズも年々高まっており、院内各科と連携した診療も行っております。特に若手医師に対しては、こうした診療上のことについてカンファレンスを通じ積極的にディスカッションする機会を設けています。

高齢者の認知症・うつ病コホートであるいきいき健診にも参加し、弘前市と共同で行う五歳児発達健診、学校コホートなども継続的に行っており、様々な形で成果が発表されております。特に学会活動としましては、令和五年は十一月十四日から十六日において、全国学会である第六十四回日本児童青年精神医学会を弘前で開催いたしました。本会は当初予定していた会場の事情などもあり、日程や開催形式を大幅に変更するなどの対応が必要とされましたが、本学および講座関係者の皆様のお陰様でどうにか開催することができ、成功裏に終えることができました。この場を借りて改めて御礼申し上げます。

こうした学会、研究活動の中で、昨年は講師の坂本由唯がInternational Society for Autism Research（INSAR）のAnnual Meetingでの発表（「Association between the Financial Impact of COVID-19 Pandemic and Mental Health of 5 Years Old Children with Neurodevelopmental Traits in Japan」）に対して日本児童青年精神医学会国際学会発表奨励賞を受賞しました。この発表は新型コロナ感染症のパンデミックによる経済的影響と発達障害特性を有する五歳児のメンタルヘルスとの関連を調査したもので、社会的にも意義深い結果を出すことができたかと思います。

このように、臨床、研究、社会的活動などを当講座では活発に行っています。関係者の皆様のご協力、ご理解を得ながら、さらに活動を広げていきたいと思います。

その他、文部科学省が進める「学校におけるがん教育」にも、県教育庁の協力のもと、がん教育検討委員会委員および外部講師として参画しています。二〇一七年より小中高等学校十七校で授業をしてきましたが、今年度はすでに小中高十校の外部講師の招聘があり、うれしいかぎりです。今まさに、がん医療を病院から社会参加に導くための活動が始まっております。

当科は今年、開設十七年目を迎えました。ここまで来られたのもひとえに、各講座の皆様のご支援とご指導の賜物と、深く感謝しております。そして何よりも苦しい時にも日々精進してくれている教室員と病棟、外来そして腫瘍センターの診療スタッフのおかげです。この場を借りて感謝申し上げます。小さな研究室ではありますが、全員で頑張っております。今後とも当研究室ならびにスタッフへのご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。そして、医学部生、研修医のみなさまもどうぞ興味をもっていただければ幸いです。

部活動紹介

男子バレーボール部

医学科四年　野村大輝

弘前大学医学部男子バレー部主将の医学科四年野村大輝です。弘前大学医学部男子バレー部は一九五九年に創部されてから今年で六十五年となる、歴史のある部活です。現在顧問は大学院保健学研究科生体検査科学領域の丹藤雄介教授です。過去には東医体三位や北医体優勝などを経験しており、現在も東北学生リーグや東医体、北医体で上位を目指して日々練習に取り組んでいます。

練習は毎週火曜日に医学体育館で、金曜日と日曜日は文京第一体育館で行っています。練習時間は二時間と短めですが、一回一回の練習の質を高くすることを心がけており、コーチの方に指導をしてもらいながら密度の濃い練習を行っています。部員は医学科が十八人、保健学科が十八人、計三十六人で活動しています。ここ数年はマネージャーに人気があり、現在は十二人が所属しています。

医学部男子バレー部の特徴は、入部時に初心者だった部員でも活躍する部員が多いことです。現在所属している部員の半数以上は大学からバレーを始めました。しかしながら、日々の練習に一生懸命に取り組んだ結果、スタメンを勝ち取ったり活躍したりする部員は多くいます。部員たちは経験者も初心者もお互いに刺激し合いながら切磋琢磨して、日々の練習に取り組んでいます。

また、弘大医学部バレー部は部員全体の仲がとても良いことです。季節ごとに花見やBBQ、キャンプ、クリスマス会、運動会などイベントが多く、練習終わりに部員同士で食事に行くことも多いです。またリーグ戦や東医体、北医体、練習試合などで遠征に行くことも多いので、とても多くの時間を共にする部員同士の仲は非常に良いです。

最後になりますが、弘前大学医学部男子バレーボール部はバレーに興味がある人、やってみたい人、マネージャーとして選手を支えたい人をいつでもお待ちしております。初心者大歓迎です！興味のある方はぜひご連絡ください！

Instagram: hiromed_vbc

女子バレーボール部

医学科四年　笹原妙見

私たち医学部女子バレーボール部には現在、医学科十三名、保健学科九名の計二十二名が所属しています。練習は週に三日行っており、五月ごろに行われる北医体や八月の東医体、十二月の弘前市バレーボール選手権大会に参加しています。直近では第六十六回の東医体でベスト8を達成することができました。コロナ禍で多くの大会が開催されず、ほとんどの部員にとって大学に入り初めての大会であったものの健闘することができたこと、喜ばしく思います。今年はベスト4以上を目指し全力で戦い抜きたいと思います。

さて、バレーボールというと相手コートの床にボールを落とせば点を取れる、落とされれば点を取られるという単純明快なスポーツです。ですがその一点に至るまでの過程は非常に多様で激しさと柔軟さが混在し、プレーヤーも観客も一体となり熱くなれる最高のスポーツです。バレーボールはチームプレイではありますが、やはり一人一人のスキルも重要です。個々人が練習を繰り返し上達したうえで、その仲間の努力を認め合い、励ましあいながら仲間の拾ってくれたボールを、そして思いを繋ぐ、そんなスポーツです。それはこれから私たちが目指す医療の現場においても必ず生きてくる力だと信じています。

現在我が部には、経験者、大学からバレーボールを始めた者、そもそも運動部に入るのが初めての者と、様々な部員が在籍していますが、学年や経験の垣根を超えて日々互いに互いを鼓舞し、刺激し合える環境となっています。一見動きが多くて難しそう、とっつきにくいと感じることもあるかと思いますし、確かに初めのうちはボールをあげる動作一つとっても難しく感じるかと思います。ですがバレーにほんの少しでも興味のある方であれば、一度ボールに触れ、仲間と輪になり助け合い練習していく内に、どんどんバレーの魅力に引き込まれると思います。いえ、引き込んで見せます！初心者経験者関係なく、部員全員がバレーボールをこよなく愛し、心から楽しんでいる我々医学部女子バレーボール部に入部してみませんか？見学も大歓迎です！いつでもお待ちしております！

人事異動（(R6.6.1～R6.8.31）

●医学研究科所属

【昇任】

発令日	所属	職名	氏名	前所属
R6.6.1	産科婦人科学講座	准教授	重藤　龍比古	産科婦人科学講座　講師
R6.6.1	総合地域医療推進学講座	講師	小林　只	総合診療部　助教

【採用】

発令日	所属	職名	氏名	前所属
R6.7.1	社会医学講座	特任助教	吉田　一隆	ハーバード大学T.H.Chan公衆衛生大学院試見国際保健プログラム　研究員

【配置換】

発令日	所属	職名	氏名	前所属
R6.6.1	消化器外科学講座	助教	原　裕太郎	消化器外科、乳腺外科、甲状腺外科　助教
R6.7.1	循環器腎臓内科学講座	講師	伊藤　太平	不整脈先進治療学講座　講師

【辞職】

発令日	所属	職名	氏名	異動先等
R6.6.30	附属地域基盤型医療人材育成センター（医学教育学）	助教	野村　理	東海国立大学機構岐阜大学医学教育開発研究センター
R6.7.31	総合地域医療推進学講座	助教	片貝　武	つがる総合病院
R6.8.31	循環器腎臓内科学講座	助教	加藤　朋	青森県立中央病院

●附属病院所属

【昇任】

発令日	所属	職名	氏名	前所属
R6.6.1	周産母子センター	准教授	福原　理恵	周産母子センター　講師
R6.6.1	産科婦人科	講師	飯野　香理	産科婦人科　助教
R6.7.1	臨床試験管理センター	准教授	三浦　卓也	消化器外科，乳腺外科，甲状腺外科　講師
R6.7.1	消化器外科，乳腺外科，甲状腺外科	講師	吉田　枝里	消化器外科，乳腺外科，甲状腺外科　助教
R6.8.1	呼吸器内科，感染症科	准教授	當麻　景章	呼吸器内科，感染症科　講師から
R6.8.1	総合診療部	准教授	米田　博輝	総合診療部　講師から

【採用】

発令日	所属	職名	氏名	前所属
R6.9.1	放射線診断科	助教	藤田　環	弘前総合医療センター

【配置換】

発令日	所属	職名	氏名	前所属
R6.6.1	神経科精神科	講師	玉井　康之	保・心理支援科学　教授
R6.6.1	総合診療部	講師	米田　博輝	医・総合地域医療推進学講座　講師

【辞職】

発令日	所属	職名	氏名	異動先等
R6.6.30	総合診療部	准教授	大沢　弘	鷹揚郷腎研究所弘前病院
R6.6.30	検査部	助教	土屋　純一郎	青森県立中央病院
R6.8.31	泌尿器科	講師	相馬　理	弘前総合医療センター
R6.8.31	放射線診断科	助教	飯田　沙野	東京ベイ先端医療・幕張クリニック

診療教授等新規称号付与者（R6.6～R6.8）

称号	氏名	所属	期間
診療教授	玉井　康之	神経科精神科	令和6年8月1日～令和9年7月31日

編集後記

医学部ウォーカー百十号が完成いたしました。ご寄稿いただきました沢山の先生方、学生の皆さんに心から感謝申し上げます。編集後記を担当することになり、これまでご担当された先生方の編集後記を振り返って読んでみたところ、少なくとも直近の過去十号にわたって、「コロナ」という文字が見受けられました。（と言いながら、本号でも使用してしまいました。）いかにコロナ禍に翻弄されていたかということだと思います。さすがに、もう大丈夫ではないかと思っていた矢先でしたが、執筆時点では、コロナウイルス感染症の感染者数が再上昇しているというニュースが流れております。

それでも、かなり日常が戻って来ている印象を受けます。おかげさまで、今年は岩木健康増進プロジェクトもコロナを意識することなく無事開催することが出来ましたし、出張で移動する際の交通機関もホテルも混んでおり、弘前ねぷたでは海外からの観光客も多く見られ、コロナ禍前の賑わいに戻っていたように思います。本号でも、各賞を受賞された先生方・学生さんはリアルに学会場に参加して受賞されているようで、掲載写真の皆さんの笑顔にこちらまで嬉しくなってきます。

次号以降も皆さんからの沢山のご寄稿をお待ちしております。